

今月の金融マーケット

国内金融マーケット ～不良債権処理は山を越えたか～

経済調査部 熊野 英生



2003 年度中間決算から窺える期待感

2003 年度中間決算によると、主要行では不良債権処分損が業務純益の範囲内に収まるようになり、経常利益が捻出できるようになった。主要行の不良債権処分損は、りそな銀行が 1.1 兆円と突出した処分損を計上しているのを除くと、0.6 兆円と極めて低レベルになる。また、リスク管理債権残高についても 18.3 兆円と、3 月末から半年で 2.8 兆円削減され、ピーク時（2002 年 3 月末 27.0 兆円）の 2/3 の水準まで減少してきている。これらの材料がポジティブに評価され、「銀行の不良債権処理は山を越えたのではないか」という見方につながっている。

不良債権の中身

だが、これらの状況証拠だけでは安心できない。リスク管理債権の内訳は、要管理債権が大きく減ったが、破綻懸念先以下債権はさほど減ってはいない。要管理債権が減ったのは、景気回復の恩恵を受けて、当該債権が境界線ぎりぎりの判定で査定区分を格上げされたためだと考えられる。注意すべきは、破綻懸念先以下債権が以前と変わらないペースで新規発生していることだ。破綻懸念先以下債権の残高は、この半年間でオフバランス化が進捗しなかったために、削減ペースが足踏みしている。今後、景気が循環的に悪化して、要管理債権や破綻懸念先以下債権の新規発生が増えるような事態になれば、引当負担や処分損は増えることになる。そうなると、償却負担が重くなって、不良債権処理の進捗も遅くなるだろう。

自己資本比率の改善

中間決算で前向きに評価されている材料として、もうひとつに自己資本比率の改善がある。主要行の自己資本比率は、2001 年度 10.4% 2002 年度 9.4% 2003 年度中間 10.8%と急回復する格好となった。直感的には、収益改善によって自己資本が積み増されたと感じるが、必ずしもそうではない。2003 年度中間期は、3 月末よりも +1.4%の改善をみている。このうち、+0.76%が自己資本積み増し効果の寄与、+0.39%が有価証券含み益の寄与、+0.29%がリスクアセットの圧縮効果の寄与となり、自己資本積み増し効果以外が半分を占める。これは、主要行の株式含み損益が、1.89 兆円の含み益と大きく改善した効果が大きい。また、自己資本積み増し効果にしても、東京都からの銀行税還付効果（+0.09%）・劣後ローン増加のほか、過去 2 年間で毎半期 1 兆円生じていた株式売却損・償却損が今回はほぼなくなった効果が見逃げせない。このように、自己資本比率上昇の背景には、株価上昇の直接・間接的效果が無視できないほどに大きいと理解できる。

結局、中間決算を概観すると、出来上がりの数字は悪くないが、景気回復や株価上昇という外部環境の効果がまだまだ大きいという印象が強い。不良債権問題が山を越えたという勝利宣言を謳うのは時期尚早であろう。

くまの ひでお（主任研究員）